



The Kyoto University Library Bulletin

わが図書館の思い出

足 利 惇 氏

図書館にはわが学生時代を通じてまたその以後にもずいぶん厄介になったものであるが、その間今日でも鮮やかに眼底に残っている印象も二、三にとどまらない。大正の始めごろ、私の中学時代の東京の名だたる図書館といえば、まず日比谷の南葵（なんき）文庫や番町の大橋図書館などを数えることができるが、なかでもよく通った思い出の多いのは上野の国立図書館であった。このころよく見受けられるように、入館する学生たちが図書館の入口の前に長蛇の列をつくり長い時間露天に順番を待つ必要もなく、閲覧人の数もまばらで、薄暗い階下の下足場で、すのこの上でじめじめしめった備えつけの草履にはきかえて、冷たい石の階段を登り閲覧室へ入るのが常であった。現在、北海道大学の触媒研究所長の堀内寿郎君とは常連で、夕方になると館外に張り出した喫茶室で、暖かい牛乳と焼ききたてのトーストパンとですますことが多かった。帰りは人気の少ない上野公園の茂みを青白いガス燈をたよりに抜けて帰ったが、今思い出しても懐しい限りである。

今から30年前の外遊のとき、パリ大学の高等研究所の図書室にもよく出入したが、閲覧室はたいして広くもなく、室の四方には金網を張り、鍵をかけてある書棚がならんでいる。稀観本か重要な書物ばかりなどであろう。もし所用の本が見たければ掛員にいちいち錠をはずしてもらわなければならない。出してもらった書物は室外に持ち出すことを許されず、粗末なテーブルの上に広げて見るわけであるが、ある時同じテーブルの私の向う側に年は27、8位と思われる妙齡の夫人が鉛筆で字を追うて読みふけているのが眼に入った。何語の書物かとこちらで盗み見るとそれは楔形文字のテキストであった。それにはちょっと度胆を抜かれたが、鉛筆で追う早さから見て相当の学力ある学生(?)と察せられ大いに敬意を表したわけであった。この頃でこそわが国にも楔形文書研究の学者や学生も少しづつその数を増してはいるが、30年以前の当時ではわが国の学問の進歩はまだまだであると痛感したものであった。

国民図書館（ビブリオテーク・ナショナル）のプロッシュェ氏に会ったのもその当時のことである。氏はトルコ・ペルシア・アラビアのいわゆる近東文書に精通し、その語学文学の造詣の深いことは世界的学者として有名であるが、図書館における彼は少しも風采をかまわず、後進の私に対して手をとらんばかりの親切を示された。パリ大学のサンスクリット講座の創始者シェジィ氏も、実は彼と同じような図書館の一館員に過ぎなかった。図書館がたんに図書の蒐集所ばかりではなく、同時に立派な学者の育成所でありブールの場となり得ることは、あるいはわが国では機構の上からむつかしいことかも知れないが、もし可能であるならば、わが国の学問を一層自由に発展させる一大殿堂となることを確信する。

(文学部教授)

HRAF室 (Human Relations Area Files) の開室準備進む

東南アジア研究センターの努力によって、京都大学は1962年5月10日をもって Human Relations Area Files (HRAF と略称) のメンバーとして正式に選ばれた。その結果ぼう大な資料が、アメリカのユール大学におかれている HRAF 本部から送付されてきた。資料は一応本館に集積され、1964年2月 HRAF 本部より派遣されたマーフィ 女史から資料の整理法について指導を受け、同年4月より、本館の講演室を HRAF 室として転用し、本格的に資料の整理を始めた。



HRAF は「人間の文化や社会を研究するあらゆる科学にたいし、資料蒐集と研究成果公開の便宜を図ること」を目的にうたっているが、その事業は、もっぱら比較文化論の観点から、地球上のあらゆる社会を対象になされた実証的研究の業績をひろく集め、それを独自のやり方で体系的に整理し、研究者の参考に供することである。

資料は、単行本であると、雑誌論文であることを問わず、各国の学者のすぐれた研究業績を、各頁ごとに写真にとって、20.5×12.5cm のスリップに印刷したものである。現在本館 HRAF 室には約 220 万枚以上のスリップが集積されているが、これらはまず大きく、Asia, Africa, Europe, Middle East, North America, South America, Russia, Oceania に地域別され、各地域がさらに民族別に区分されている。

つぎに、個々の民族は 880 余の主題項目に区分される。たとえば 551 という主題項目は Personal Names ということになっている。いまもし、イロコイ族の Personal Names についての資料が欲しければ、North America の NM 9 の Iroquois 族の 551 のところをみれば、欲するデータがたちどころに得られる。同様にアランダ族のそれが欲しければ、Oceania の 018 Aranda 族の 551 のところを見ればよい。しかも、HRAF においては、英語以外で書かれたものはすべて英語に訳されているから、英語さえ読めればデータを利用する上で、言語上の障害はないわけである。

HRAF の整理法は、情報管理の立場からみて、われわれ図書館員にとっては、きわめて興味深い。従来の図書館的な整理法では、整理の単位は、1冊ごとの図書あるいは雑誌であった。その後整理単位は、雑誌の場合、ひとつひとつの論文にまで細密化されてきたが、HRAF の場合、整理単位はひとつひとつの情報そのものである。すなわち、オリジナルの本文は、まず1頁ごとのスリップに分解される。この1枚のスリップにはいくつかの情報が含まれているが、その情報単位ごとに、さきに述べた 880 余の主題項目の番号が与えられる。いま、1枚のスリップに3つの情報が含まれているとすれば、ひとつひとつの情報に、主題項目の番号が与えられる。そして同一のスリップが3か所のそれぞれの番号のところファイルされているのである。利用者は図書館のカードを検索するのと同じに、求める民族名の、欲する番号のところを見さえすればよい。図書館のカード目録が単に情報のロケーションを案内するだけであるのに対して、HRAF では、カード目録の検索と同様な手順で、情報そのものにただちに到達しうるのである。したがって、HRAF

は資料整理のいわば理想的な形態を示すものと言えよう。

HRAF は 1949 年にエール大学に創設されたが、その創設前に 20 年ほどの前史を有している。したがって今日までにすでに 35 年余の歴史を持つが、その間ファイルは絶え間なく成長を続けてきている。たとえば 1962 年から 64 年にかけて、スリップの数は 165 万枚から 220 万枚までに成長している。今後ともますますファイルは大きく成長していくであろう。

HRAF のファイル・コピーには、Original copies と Micro copies の二種がある。Original copies は正式のメンバーにのみ配布される。京都大学はアジア地域における唯一の正式メンバーであるから、Original copies のあるのはアジア地域では本館のみである。Micro copies は国内でも 2 か所に備えられているが、ファイル自体がさきに述べたように成長していくものであるから、その点 Micro copies では、ファイルの成長に追いつけない。

HRAF のような貴重な資料集成が本館に設置され、図書館活動の一環として運営されることになったのはこの上ない喜びである。いま開室を前に資料整理の最後の追込みに入っているが、HRAF 室が正式に開室されたとき、研究者に与える利便は実に大きいものであろう。

図 書 館 と の 4 年 間

I

H・A 生

図書館は、僕にとってある意味では空気のような存在であった。日頃は惰性的に利用するのみでそれ程その存在の貴重さを自覚していた訳ではないが、いざ卒業ということになって開き直って考えてみると、教室の延長として、また書斎の代替物として、あるいはまた観念的、クラブ活動の場として、なんと色々な必要不可欠の物質的手段をわれわれに提供してくれてきたかという事に思い至り、いまさらながら湧き出づる感謝の念を禁じえない次第である。

しかしここでは、かような感謝のために 4 年間の回顧を無批判に展開することをやめ、改善が比較的容易だと見られる現実の図書館についての不平不満をちょっぴり披瀝してみたい。図書館の近代化のためのなにかの参考となれば幸である。

1. 学習は閉鎖的かつ静かな環境でやれとはよくいわれる言葉である。だが閲覧室の現状はどうだろう。長い中央の通路を闊歩する足音、うち興ずる談笑、イスのきしむ音、見え隠れする人の姿、その他様々な聴覚的視覚的刺激的の氾濫が、さ程神経過敏でない人々をも苦しめ、知らず知らずのうちに勉強の能率を低下させているのではなからうか。これら館内の開放性に起因する障害は、例えば閲覧室を三つぐらいに区切って機能分化し、ひとつの部屋は娯楽本位に図書館を利用する人のための雑誌室（談話や喫煙を許し、廊下のソファはここに移す）。他は文科系学習室、理科系学習室と配分するという風に工夫することにより、大いに緩和されうと思われる。グループ学習者専用の部屋も作るに越したことはない。こうすれば、夏の通風の問題は残るが、静寂のしじまに包まれて空想の世界を天翔るための条件がずっとよくなると思

われる。

2. 諸々の事情で昼休みに図書を借出す必要に迫られる学生の数は実に多いと思われるが、係の人の休憩時間は11時～12時、または1時～2時として便宜を計ってもらえないものか。

3. 10月や2月の試験期は、開架の書籍でも夜8時から朝9時の間館外帯出を認めたり（期限内に返さぬ者には以後の利用を拒絶する等の制裁を考える）、混雑のあまり閲覧者の席がなくなる時は一階の空いている部屋をこれにあてる等の試験期に対応した弾力的なサービスが考えられて当然ではなからうか？

4. 他人の引いた赤線で本が真赤に泣い

ていたり、ひどい場合には無惨にも重要箇所のみページぐち剥ぎ取られていたりして後の利用者は非常な迷惑を蒙っているが、図書が返却された時は一々汚損が加えられていないかをその場で検査し徹しく取締ってもらえないだろうか？

その他、新刊書をもっと早く利用出来るようにしてもらいたい、利用度の高い教科書類は複数購入してもらいたい、冬のストーブによる空気汚染に対してもっと有効な換気措置を講じてもらいたい等欲を云えばキリがないが、こういう不平に勝るとも劣らぬ程図書館への愛着や感謝を胸に抱いていることを強調しつつ擱筆することにする。

（法学部4回生）

II

奥田秀毅

時の経つのははやい。もう卒業……。4年間何をし、何が残ったか？何も残らなかった。残念ながら「俺は大学時代にこれをやったんだ」と人に誇れるものはない。しかしこれでいいんだと思う。「予定のコースである」……と云い切れば嘘になるだろうが、満更嘘でもない。ぼくだって入学当初は勢いこんでいた。勉強もし有意義な充実した生活をしたと思った。何かスタンドプレーも演じてみたかった。だが、やがて考えが変わってきた。大学在学中は意識的な blind days にしてやろうと。

そう思ってから生活が愉しくなった。勉強しなければならぬと云う高校時代から続いていた圧迫感から逃れ得た。充実した生活をと云う緊張感から解放された。五月の空は青かった。それからいろいろな事に食いついていった。紅灯の巻も歩いた、旅行もした、遊びも覚えた、工場で工具さんと共に働いたこともあった、恋愛もした、友人知己もたくさんできた。その間、人並みに悩み、苦しんだ、考えた。そして気が

つけば卒業が目前に控えていた。

大学生と云うものが専門知識を身につけていなければならないものとすれば、ぼくは完全に失格である。しかし、ぼくの当初の意図は大体果せた。ぼくでも努力することさえ忘れなければ人と十分伍していけるし、自分が先頭にたつてやれば、そしてそれが意味のあることであれば人も自分についてくると云うことを肌で知ったことは大きな収穫であった。

ぼくの4年間の生活も今の平均の大学生の姿かもしれない。そこにはあまり大学図書館とのつながりはなかった。何が原因かをぼくなり分析しなくてもないがすでに紙数はつきた。一言だけ述べたい。京大と云う大学の性質の問題も絡んでくるのだが図書館を学生のものにするか、大学院学生を始めとする研究者・学者を対象とするかを方針として決めることは必要だと思う。学生のものにするには教養部の図書室も本部の図書館も、ぼくの知る限りでは貧弱であった。そのために自分で買って読む方が手軽で便利だったし、おかげで本がたくさんたまったような次第である。

（薬学部4回生）

アメリカにおける

アジア研究資料展開催

本館と京都アメリカ文化センターとの共催で、2月9日より12日まで4日間、陳列室で資料展を開催した。9日は10時より開会式を行い、本学に縁の深い米国大使館B・ファーズ参事官も出席され、挨拶の言葉を述べられた。



展示された資料は、最近のアメリカにおけるアジア研究の成果を示す図書約500点余であるが、そのうちの3分の2以上が、中国および日本関係図書である。これらの著者の中には本学で研究された学者の名前も多く見出され、資料展をいっそう親しみ深いものにした。

参観者には資料展の目録を配布したが、1,000部以上用意した目録が最終日には不足し、係員をあわてさせるほどであった。厳寒期しかも試験期であるため、参観者が少ないのではないかと当初の予想を覆し、盛況裡に終了した。

70年前の図書寄贈依頼

京都大学が1897年(明治30年)に設立された当時、木下総長の名前で全国的に図書の寄贈を依頼したことは、「京都大学附属図書館60年史」にも明らかにされていることであるが、このほど、このことを報じた当時の新聞記事が富山市の村上清造氏から送られてきた。ひろく全国的な支援を得て設立された本学図書館は「我国西部の必要に応ずべし」(附属図書館60年史 P.4)という意気込みで発足し、たんに本学関係者だけでなく、誰にでも広く公開することを最初から意図していたが、このことは以下の記事においても、「一般公衆の閲覧を許す由」と報ぜられている。資料を送られた村上清造氏の厚志に深く感謝したい。

京都大学創立記念

今般京都帝国大学に於ては創立記念として左記の手續に依り広く有志者より書籍文書標本等の寄贈を受け該校図書館設備の完成を須て一般公衆の閲覧を許す由にて同大学総長文学博士木下広次氏より富山県へも寄附方を依頼し来れりと

- 1 本学図書標本等を寄贈せんとする人は其目録冊数目方等を詳記し本学へ通知せられたし
- 2 寄贈者にして運送費をも支弁せらるる場合に於ては前条の手續を要せず直に現品を本学へ送付せられたし
- 3 東京及び京都以外の地に在りては第1項の通知を領したるときは其送付の方法に関しては別に本学より寄贈者に通知をすべし
- 4 第1項より通知を得たる書籍等にして其運

送費多額を要し本学経費を以て支弁し能はざるときは発送の延期を申出つることもあるべし

- 5 本学に於て現品受領を了りたるときは本学所定の本受領証を寄贈者へ送付すべし
- 6 寄贈書籍標本等に寄贈者の氏名を附記して鄭重に保存すべし
本学創立の際に受領したる物に就きては尚ほ其旨をも附記すべし
- 7 寄贈者の意見により金員を寄贈し図書標本等の講求費に充てんことを申出でらるる時は本学に於て適宜之を講求し前諸項の手續をなすべし

(北陸政論, 1495号明治31年3月24日付)

○ 第9回太平洋学術会議議事録 (Proceedings of the Ninth Pacific Science Congress)

太平洋学術研究連絡委員会(委員長 日高孝次 日本学術会議内)より、1957年にタイ国バンコックのチュラロンコン大学で開催された議事録の寄贈を受けた。太平洋学術会議は4年に1回開かれ、太平洋地域に関する多くの研究報告を発表しているが、今回の議事録も次の20巻よりなり、本学関係者の論文・報告もいくつか見られる。

vol. 1 Introductory and International Cooperation, vol. 2 Animal Improvement, vol. 3 Anthropology and Social Science, vol. 4 Botany, vol. 5 Chemistry in the Development of Natural Resources, vol. 6 Coconut Problems, vol. 7 Conservation, vol. 8 Crop Improvements, vol. 9 Entomology, vol. 10 Fisheries, vol. 11 Forest Resources, vol. 12 Geology and Geophysics, vol. 13 Meteorology, vol. 14 Museum, vol. 15 Nutrition, vol. 16 Oceanography, vol. 17 Public Health and Medical Sciences, vol. 18 Soil and Land Classification, vol. 19 Zoology, vol. 20 Climate, Vegetation, and Rational Land Utilization in the Humid Tropics.

○ Ежегодник книги СССР (ソ連邦図書年報)

Всесоюзная книжная палата. (全ソ図書院) 編

「ソ連邦図書年報」はソ連邦の出版目録である。これには官庁出版物、継続出版物、その他若干のものを除くソ連邦で出版されたあらゆる図書と、*Книжной летописьに登録されたすべての図書が掲載されている。年報は毎年2巻より成り、第1巻には社会科学・人文科学が、第2巻には自然科学が掲載されている。また両者の巻には各々補助索引—著者名、書名、民族語及び外国語別、外国語からの翻訳、件名索引—が付けられている。排列の大綱は(登録文献分類表に基づく)主題別で、その中を著者のアルファベット順に排列する。記述は著者名、書名、出版地、出版社、出版年、大きさ、ページ数、値段が掲載されている。

この「ソ連邦図書年報」は本館に1955年以降のものが所蔵されており、書誌学者、図書館員をはじめ、広く各種の専門家、科学研究者グループの参考書となっている。

* ソ連邦図書院が発行している新刊書または予告図書の分類目録で年間約5万部の図書を収録している。

○ Библиографик советской библиографии. (ソ連邦書誌の書誌)

Всесоюзная книжная палата. (全ソ図書院) 編

「ソ連邦書誌の書誌」は全ソ図書院・文献目録部に登録された図書目録である。これには文献索引および目録、雑誌の索引および一覧、書目一覧、書誌的活動の理論、歴史、方法論と、図書館学の諸問題に関する文献等が含まれている。記述は著者名、書名、出版社、出版年、書誌の掲載されている巻数およびページ数をも明示している。索引として著者名、団体名、地理索引がつけられている。本館では1956—1962年版4冊が所蔵されており他大学、研究者からも多く利用されている。

——故尾崎教授の蔵書農学部へ寄贈される——

昨年始め、三重大学から本学に着任された尾崎教授は、同年11月に他界された。

東京、滋賀、三重の各大学において、あるいは遠くカナダにおいて研究活動を続けてこられた同教授の業績はまことに大きい。専門の農芸化学、中でも植物代謝に関する研究は、学界に広く知られている。

このたびご遺族から、同教授の貴重な蔵書を多数ご寄贈いただいたので、農学研究に努力される教官、学生のために、それが高度に利用されるよう配慮してゆきたい。

——蟹江博士の遺稿保存を託さる——

このほど、蟹江義丸氏の遺族から、博士の名著「孔子研究」の原稿をはじめ、幾多の論文原稿、校正刷り、論文の掲載された当時の雑誌、ノート、メモ等を、人文科学研究所島田助教授を通じて、本館に保存方が依頼された。蟹江博士は、今から60年も前になくなった方なので御存知でない方も多いと思われるので、ここにその略歴を紹介する。

博士は、明治5年富山に生れ、同27年東京帝国大学哲学科に入学、同30年7月に卒業した。生来の蒲柳の質と、日夜の勉学がたたって、早くから結核におかされ、明治30年に京都で静養しつつ、真宗大学の講師をつとめたこともある。同31年、病勢の小康を得て帰京し、ただちに東大大学院生となり、かたわら、早稲田専門学校に教弁をとつた。早くから祖父基徳氏の影響を受けて、東洋倫理思想の研究に志し、大学院生となるにおよんで、孔子の哲学思想研究に没頭した。この間にあらわされた「孔子研究」は、博引傍証、しかもよく自説をのべた、まれに見る名著といわれ、これによつて文学博士となつた。

この論文については、本学の貝塚茂樹教授も高く評価され、教授の著書「孔子」(岩波新書65)に次のように紹介されている。

「蟹江博士の『孔子研究』は明治時代において、従来の和漢の研究を集大成した名著であつた。その学術的価値は、今でも決して落ちない」と。

この「孔子研究」の他、日本の哲学研究史に名をつらねる井上哲次郎、深作安文、藤井健次郎等と協力して、当時の学界に大きく貢献した書物をいくつも作りだした。大小の論文は、「哲学雑誌」「東洋哲学」「倫理界」その他の雑誌に数多く掲載された。明治33年東京高等師範学校の教授となつたが、宿病は次第につり、同36年より沼津の地に静養した。しかし病中なお勉学をやめず、

「星月のめぐりめぐりて止らぬ心を己が心ともがな」

と詠じつつ明治37年6月になつた。年僅かに33。

今般寄せられた遺稿類の中には、上記の論文原稿のほかに、博士が活躍中より交友した人々で、後に有数の学者となつた人々の私信が多く含まれており、博士の人柄とともに、忘れられようとしている明治時代の、特に気鋭の学者達の生活、風潮を伺い知るよすがともなるので、下にこれら私信の発信人を列挙する。

姉崎正治、星野 恒、深作安文、藤岡勝二、紀平正美、岸本能武太、桑木啟翼、松本亦太郎、諸橋轍次、元良勇次郎、中島力造、南日恒太郎、岡田正之、小西重直、田部隆次、高島平三郎、建部遜吾、得能 文、友枝高彦、塚原政治、綱島栄一郎(号：梁川)、宇野哲人、内田銀蔵、吉田賢竜、吉田熊次。

——本学雑誌目録出来る——

京都大学学術雑誌総合目録 自然科学欧文編 1965 354 P.

2月に刊行されたこの目録は、京都大学所蔵雑誌のうち欧文で書かれた自然科学に関するもの5238種を収録したものである。この種の目録は昭和18年に刊行されたまゝで、その後は期待されながらも種々の事情で出版されなかった。今回の出版は一昨年文部省から、全国学術雑誌総合目録(未刊行)を編さんするために調査を依頼されたさいに、各部局図書掛の協力によって収集したカード目録を原稿として編さんしたものである。

長らく日の目を見なかったこれらのカードから急に編さんしたために、記述様式が不統一であったり、排列が前後したり、ロシア語の翻字がISO(International Organization for Standardization)に従ったものもあれば、ALA(American Library Association)によつたものもある。また行の末尾のシラブルの切り方なども、紙面の節約のため機械的に切っているのを見苦しい点も少くない。

しかしこの目録は自然科学の研究者にとってかなりの負担になっている学術雑誌の所在調査の労力を少しは軽く、また購入雑誌選択上の参考にもなりうるであろう。今後記述上の誤りや、掲載もれ、あたらしく購入を始めたものなどを逐次追加訂正する補遺版を刊行するとともに来年度以降ひきつづいて、人文科学欧文篇及び人文・自然の和文雑誌目録も計画されている。

館内めぐり

図書団地住宅難の嘆き

書庫掛

本学のすべての図書が受入掛で入籍され、その性格や役割が目録掛で評価されて、利用者知識と情報を提供する奉仕者に育成されるとすれば、書庫掛はこの奉仕者に快適な住居と環境を与える団地の管理者であろう。

書庫という名のこの団地は本館では床面積 820 余坪の新、旧 2 つの書庫よりなっている。床面積 430 余坪の旧書庫は本館の蔵書 40 余万冊の内約 12 万冊と部局図書 13 万余冊の保存書庫として使われている。新書庫は床面積 399 余坪、そこに延長 825.950 cm の書架が設置されている。この書架上に日夜利用者に奉仕する 28 万余冊の図書が、びっしりと排架されて、住宅難を嘆いている。ぼう大なこの図書群から破損図書や汚損したラベルを探し出すことは相当疲れる。架上図書の排列整頓、ラベルの更新、和装本の入帙、題簽書入等も楽ではないが架上の図書を排列を乱さず、大量に移動することは全くの重労働である。しかし、どんな近代的図書館でも架上図書の移動は人間の原始体力による外はないであろう。

本館が最も誇りとする貴重書や、特殊文庫の災害対策は頭の痛い問題であるが、雑誌・新聞の製本、図書の修理等もまた大きな重荷である。現在、和洋の雑誌・新聞の種類は洋雑誌 592 (寄贈 572) 種、和雑誌 1,681 (寄贈 1,570) 種、計 2,273 (寄贈 2,142) 種、寄贈の欧字新聞 16 種、邦字新聞 69 (寄贈 57) 種である。予算の関係上全部を製本することができないので、学術的価値と利用度とに重点をおき昭和 38 年度には和洋の雑誌・新聞を計 395 種 787 冊を製本し、破損図書計 288 種 546 冊を修理した。ところで、ときどき製本期間のおくれが批難されるが、雑誌が製本されて利用者の手許に届くまでには会計的処理の外、種々の事務的手続を経なければならぬ。利用者の不満もよくわかるが、この間の事情も了承していただきたい。

…あとかぎ 閲覧室の窓からさし込む日の光に、もう十分春が感じられる。そして今年も多くの人が卒業されるが、先ずその人たちに「オメデトウ」を申し上げよう。しかし、そうはいうものの、今まで閲覧室においておもしろいおもしろい姿体で読書されていたものが、急に消えるとなると喜びの中にも一寸淋しいものを感じる。卒業後は、学んでこられた理論的なものを実践へと移してゆかれるのであろうが、図書館で学習されたものも大きく役立ててほしいと願うとともに、そのことから今後図書館がより利用しやすいもの、学習によつてより高いものを得られるよう図書館的な配慮の必要性を改めて考えさせられる。私達自身のどのような努力があつたとしても、その中に利用される方々の声が反映されていなければ、正しいサービスとはならないことも自覚しよう。

願わくば習慣として、卒業を期に後輩へ申し送られるいくつかの事項の中に、図書館のことが一つでもあればと思う私達である。(M・F)